

## 夏マスク

今年の夏は、日常生活でマスクの着用が基本となりました。新型コロナウイルスの感染防止対策の一環です。しかし、暑い夏場の時期のマスクの着用には抵抗がある人もいましたし、熱中症予防にも注意が必要でした。

高松出身の文壇の大御所菊池寛に「マスク」という題の短篇小説があります。よく引き合いに出される、約百年前に世界的に大流行して日本でも約39万人が亡くなったスペイン風邪の時の話です。心臓が悪いために流行の感染症に伝染しないよう、家族も含めて極力外出を控え、うがいをし、やむを得ない場合は、常にマスクを着けていた菊池寛が、5月半ばになり、気恥しくなってマスクを外していると、堂々とマスクをしている青年と出会い、その男の勇気に圧倒された気持ちになったという話です。正に今回、夏場のマスクに思い悩んだ我々にとって、マスクを堂々と着けた青年に「かなり徹底した強者の態度」を認める菊池寛の心持ちは、共感できるところがあります。

夏のマスクへの抵抗は百年前も今も変わらないのだなあ、と感慨を抱きます。因みに感染予防の基本が人との間に距離をとること、というのも百年前から変わらないとのこと。この点、科学技術の発達とは無縁の世界ですね。

感染予防のため、ほとんどの人が常に着用し始めたこともあり、マスクはひとつのファッションになっています。いろいろな素材のものが登場し、形や色、模様、図柄等も様々です。需要の増大に応じてマスクづくりには異業種からの参入もあるようで、一種のブームともいえる状況です。そんな中、夏用マスクとして保多織(ぼたおり)の手づくりマスクも登場しました。丈夫で長持ち、「多年を保つ」という意味で命名された保多織は松平頼重公が産業開発と幕府への貢献のため、創らせたという歴史があります。その独特の肌触りで、暑い讃岐の夏を涼しく過ごせそうなマスクです。

このコロナ禍では、夏マスクも生活の必需品です。故郷高松をこよなく愛していた菊池寛が生きていれば、今年の夏は正々堂々と保多織のマスクをして街を闊歩していたかも知れません。

